世界遺産登録後の熊野古道伊勢路観光の変化について

安　食　和　宏

要旨：本稿では、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」を対象として、遺産登録後の観光客数の変化、そして観光客の特徴の変化を把握しようとした。対象は三重県側の世界遺産、すなわち熊野古道伊勢路である。熊野古道伊勢路の訪問者数の推移をみると、2004 年の世界遺産登録後、順調に増加してきた。三重県が、5 年ごとに登録記念年として多種の事業を企画してきた影響が強い。ただし峠・地点別にみると、浜街道・花の窟への来訪者の集中が強まっており、2014 年以降、他の峠では総じて観光客数は減少傾向に入った。そしてコロナ禍の中で、訪問者が多い松本峠・馬越峠と他の峠との差が拡大している。次に、東紀州の観光全体の中でとらえると、伊勢路の来訪者数は約 1 割を占めている。観光客の特徴について、2001 年の調査結果と 2021～2022 年の調査結果を比較すると、中高年世代が中心となっていることや、多くの来訪者にとって熊野古道がハイキングや自然を楽しむ場として認識されていることは変わっていない。ただし、特に県外からの客と初めての客の場合は、熊野古道が世界遺産であることが古道訪問の大きな要因となっており、その歴史・文化も魅力と捉えられている。

1. はじめに

世界遺産は、1972 年の第 17 回ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）総会にて採択された「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」（通称：世界遺産条約）に基づき、人類が未来の世代に引き継いでいくべき顕著な普遍的価値を有する物件として登録されている遺産である[1)]。日本では、2022 年時点で計 25 件の世界遺産が登録されており、その内訳は文化遺産が 20 件、自然遺産が 5 件である。

世界遺産は、大きな価値を有しており保全が必要と国際的に認められた人類共通の遺産であるが、現実的には、世界遺産登録を契機として、観光産業の発展を図ろうとする試みが各地で展開されてきた（淡野 2008 など）。しかし、世界遺産登録後の観光客数の変化をみると、必ずしも増加しているわけではなく、幾つかのタイプに分類される。例えば長谷川（2010）は、登録後の観光客数の推移より、2010 年時点の国内の世界遺産 14 か所を、①客数が増加した世界遺産、②客数減少に歯止めがかかり上昇傾向に転じた世界遺産、③客数が減少した世界遺産に分類した[2)]。そして、世界遺産登録による観光効果は、今まで著名な観光地ではなかった地方の中山間地や島嶼において顕著であると指摘している（長谷川 2010）。

本稿は、登録の影響を強く受けたと想定される世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」を対象として、遺産登録後の観光客数の変化、そして観光客の特徴の変化を把握しようとするものである。「紀伊山地の霊場と参詣道」は、2004 年 7 月に世界遺産リストに登録された、日本で 12 番目の世界遺産である。紀伊山地に形成された 3 つの霊場「吉野・大峰」「熊野三山」「高野山」とそこに至る「参詣道」を合わせた世界遺産であり、三重・奈良・和歌山の三県にまたがる広域的な遺産である。また、日本の世界遺産としては初めて遺産全体が「文化的景観」として登

録されたという特徴がある（熊野古道協働会議編 2015）。

世界遺産登録と観光との関連を対象とした従来の研究をみると、合田（2011）は、岐阜県白川村における観光客の増加と観光産業の成長、そして交通渋滞問題への対応に注目している。千葉（2014）は、岩手県平泉町を対象として、観光客の行動パターンと行政の対応を論じている。そして川浪（2016）は、小笠原諸島を事例として、遺産登録後の観光客の質的な変化を明らかにした。これらの事例研究を参考にして、本研究でも、世界遺産登録後の「紀伊山地の霊場と参詣道」の観光客の変化（量的変化と質的変化）に着目する。そして、従来の研究は比較的短い期間を対象としていたのに対して、本研究ではより長い期間を設定して、およそ 20 年にわたる変化を捉えることとしたい。なお、「紀伊山地の霊場と参詣道」は広域的に分散している世界遺産であり、筆者のかつての報告（安食 1998、2003、2007）との連続性を図るため、本論では、三重県内の遺産、すなわち熊野古道伊勢路を考察の対象とする。

本稿で用いる主な資料は、一般社団法人東紀州地域振興公社（以下、本文中では東紀州地域振興公社と称する）[3]、三重県地域連携部南部地域活性化局東紀州振興課、三重県教育委員会社会教育・文化財保護課、および三重県雇用経済部観光局観光政策課が所有している資料、そしてホームページで公表している資料である。またこうした部署で筆者が直接聞き取りを行なった結果も用いる。

2. 世界遺産登録後の熊野古道伊勢路の保全・活用に関する取り組み

三重県側における熊野古道（伊勢路）の整備・宣伝事業、そして世界遺産登録に向けた事業の展開過程については、安食（1998、2003、2007）で述べた通りである。ここでは、その後の動向について、特に自治体の取り組みを中心に整理する。表 1 には、国レベル、紀伊半島（三県）レベル、そして三重県レベルでの 2000 年以降の取り組みについて、把握できたところをまとめた。

「紀伊山地の霊場と参詣道」がユネスコの世界遺産暫定リストに登載されたのが 2001 年 4 月、そして正式に世界遺産として登録されたのが 2004 年 7 月である。この世界遺産は三県にまたがる広域遺産であり、その保全と活用においては三県の連携が求められる。まず世界遺産の登録と同時に（2004 年 7 月）、世界遺産登録推進三県協議会において、参詣道を訪れる人々が守るべき「紀伊山地の参詣道ルール」が策定された。そして、世界遺産を構成する史跡などを適切に保存・管理するために、三県の教育委員会の連携により、2005 年 5 月に世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」三県協議会が設立され、その下部組織として専門委員会（学術調査委員会）と三県連絡会議が置かれた。こうした組織により、同年 10 月には、「世界遺産『紀伊山地の霊場と参詣道』に関する包括的な保存管理計画」が策定された。県ごとの計画は、この包括的な計画の下に位置づけられるもので、三重県版としては、包括的計画策定と同時に、「世界遺産『紀伊山地の霊場と参詣道』三重県保存管理計画」が策定された[4]。同年 11 月には、保存管理事業を担当する、県と地元市町の教育委員会から成る三重県世界遺産保全推進協議会、ならびに幹事会が設置された（表 1）。

表 1　世界遺産・「紀伊山地の霊場と参詣道」に関する行政の取り組みと交通・関連施設の整備（2000 年以降）

年	政府の取り組み、 紀伊半島三県の取り組み	三重県の取り組み・イベント	交通と施設の整備 （三重県東紀州地域）
2000 年	11 月　「紀伊山地の霊場と参詣道」を文化庁がユネスコに提案	4 月　みえ熊野学研究会発足 12 月　三重県教育委員会に世界遺産登録推進室を設置	
2001 年	4 月　「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産暫定リストに登載 熊野古道ネットワークが発足（三県の民間交流組織） 5 月　世界遺産登録推進三県協議会が設立	3 月　みえ熊野学研究会編集「みえ熊野の歴史と文化シリーズ」1 号を発行（2010 年まで計 10 号発行） 7 月　紀南地域世界遺産登録推進協議会が設立 8 月　三重県世界遺産学術調査委員会が設立 9 月　世界遺産登録推進紀北地域協議会が設立	12 月　道の駅「紀伊長島マンボウ」開業
2002 年	4 月　熊野古道のコアゾーン（核心地域）の確定 5 月　紀伊半島知事会議で 2004 年 6 月の登録を目指すことで合意 7 月　熊野古道の史跡指定申請書を文部科学省に提出 10 月　「紀伊山地の霊場と参詣道」シンボルマークを制定 12 月　コアゾーンを文化財保護法に基づく国の史跡として指定	6 月　熊野古道のバファーゾーン（緩衝地帯）について景観保護条例の制定（7 市町村）	
2003 年	1 月　「紀伊山地の霊場と参詣道」に関する包括的な保存管理計画を策定 2 月　「紀伊山地の霊場と参詣道」の推薦書を国からユネスコに提出 10 月　イコモス（国際記念物遺跡会議）調査員による現地調査	1 月　「紀伊山地の霊場と参詣道」三重県保存管理計画を策定 3 月　「熊野古道アクションプログラム」策定	
2004 年	**7 月　「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録** 「紀伊山地の参詣道ルール」策定 9 月　登録記念三県共同行事「森羅万象－紀伊山地からの祈り－」開催	2 月　熊野古道協働会議を設置 9 月　登録記念「熊野古道伊勢路踏破ウォーク」開催 2004～05 年　全ての峠道に「平成の道標」を設置	
2005 年		3 月　「東紀州地域交流空間整備計画」策定	

	5月　世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」三県協議会が設立 世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」学術調査委員会を設置 世界遺産三県連絡会議を設置 7月　首都圏等での「熊野文化講座」開始 10月　世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に関する包括的な保存管理計画を策定	6月　「熊野古道アクションプログラム2」策定 7月　「世界遺産伊勢路フォーラム」開催 東紀州地域振興創造会議を設置 10月　世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」三重県保存管理計画を策定 11月　三重県世界遺産保全推進協議会を設置 三重県世界遺産保全推進協議会幹事会を設置	
2006年		10〜11月「熊野古道伊勢路踏破リレーウォーク」開催 12月　熊野古道保存会連絡協議会が設立	
2007年		3月　日本風景街道「伊勢熊野みち」活動計画を策定 4月　東紀州観光まちづくり公社を設立 6月　熊野古道伊勢路を結ぶしくみづくり実行委員会を設置 9〜11月　伊勢から熊野へ「平成の熊野詣」ふれあいウォーク月間を開催 11月　熊野古道語り部友の会が総務大臣表彰を受賞	2月　「三重県立熊野古道センター」開館 4月「夢古道おわせ」開業
2008年		10〜12月　「平成の熊野詣」月間を開催 12月　「熊野古道アクションプログラム2.追記編」策定	4月　（KO道）尾鷲南ー三木里が開通、温浴施設「夢古道の湯」開業
2009年		3月　世界遺産セミナー「熊野ってなんだろう?」を開催、「熊野古道伊勢路図絵・平成の熊野詣」を発行 9〜11月　熊野から伊勢までのウォーク企画 10月　登録5周年「熊野古道国際交流シンポジウム尾鷲2009」を開催 11月　登録5周年「世界遺産国際交流シンポジウム伊勢2009」を開催	7月　「里創人・熊野倶楽部」開業
2010年	7月　三県共同の「吉野・高野・熊野の国」建国宣言、事業実行委員会を設置（事業は現在に至る）	2010〜12年　啓発用冊子の作成（「熊野古道ってなあに?」ほか4冊）	
2011年		1月　みえ熊野学研究会企画雑誌「おくまの」第1号発行（2018年まで8号を発行） 2011〜12年　テーマ別ウォーク冊子の作成（「伝承を感じる旅」ほか2冊）	
2012年			3月　（KS道）海山ー尾鷲北が開通 4月　「花の窟・お綱茶屋」開業
2013年			3月　（KS道）紀勢大内山ー紀伊長島が開通

		4 月　東紀州観光まちづくり公社が東紀州地域振興公社に名称変更 10〜11 月　熊野古道霊場めぐりモデルウォーク（計 5 回） 10〜12 月　熊野古道セミナー開催（東京、大阪、三重県）	8 月　「鬼ケ城センター」開業 9 月　（KO 道）三木里―熊野大泊が開通
2014 年		5 月　「熊野古道サポーターズクラブ」設立 5〜7 月　熊野古道セミナー開催（東京） 6 月　伊勢路踏破キヤラバン開催（伊勢神宮〜速玉大社） 6〜11 月　伊勢路踏破ウォーク（計 14 回）開催 7 月　登録 10 周年記念式典を開催 11 月　記念コンサート「谷村新司トーク＆ライブ」 12 月　「幸結びの路」フェスタ開催	3 月　（KS 道）紀伊長島―海山が開通
2015 年	12 月　世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に関する包括的な保存管理計画を改訂	3 月　「熊野古道アクションプログラム 3」策定 9〜10 月　熊野古道セミナー開催（名古屋） 12 月　世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」三重県保存管理計画を改訂 2015〜17 年　スマホ de スタンプラリー「てくてく熊野古道」事業	6 月　パーキング施設「始神テラス」開業
2016 年	1 月　世界遺産登録範囲の追加申請（和歌山県内）をユネスコに提出 10 月　世界遺産登録範囲の追加が承認される	7〜12 月　熊野古道セミナー開催（東京、名古屋、大阪）	10 月　「お綱茶屋」が道の駅「熊野・花の窟」に移行
2017 年		1 月〜　海外向け PR 動画を YouTube で配信 10〜11 月　熊野古道セミナー開催（東京、大阪）	
2018 年		8〜12 月　熊野古道セミナー開催（東京、大阪）	4 月　道の駅「熊野・板屋九郎兵衛の里」開業、飛雪の滝キャンプ場新装開業
2019 年	7 月〜　登録 15 周年記念「吉野・高野・熊野」スタンプラリー開催 10 月　登録 15 周年記念シンポジウムを開催（東京銀座）	7 月　登録 15 周年キックオフイベントを開催 9 月　熊野古道セミナー開催（東京） 10〜11 月　熊野古道ウィークを設定、各種イベント開催 11 月　三重県とスペイン・バスク自治州が「世界遺産の巡礼道を生かした協力・連携に関する覚書」を締結 12 月　登録 15 周年フィナーレイベントを開催	
2020 年		3 月　東紀州地域振興公社が「観光地域づくり法人（DMO）」の準備段階の「候補 DMO」に登録	

		4 月　東紀州地域振興公社が一般社団法人に移行	10 月「フェアフィールド・バイ・マリオット・三重御浜」ホテル開業
2021 年		3 月　小中学生向け「熊野古道伊勢路謎解きノート」作成 10～11 月　オンライン熊野古道セミナー開催（海外向け）	8 月　（KO 道）尾鷲北―尾鷲南が開通
2022 年		3 月　「熊野古道アクションプログラム 3. 追記編」策定	

注）KO 道は熊野尾鷲道路、KS 道は紀勢自動車道。
世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」三県協議会編（2015）、三重県編（2015）、安食（2003）ほかの文献の情報、関係機関のホームページ情報などを合わせて作成。

以上は、世界遺産の保存に関する、教育委員会が中心となる事業であるが、その活用については、別の取り組みがなされてきた。三県合同の事業としては、世界遺産登録時に開催された登録記念三県共同行事（2004 年 9 月）、また首都圏等での「熊野文化講座」の開催（2005 年 7 月）という記録がある。その後 2010 年には、三県共同の「吉野・高野・熊野の国」建国宣言があり、事業実行委員会を設置して（三重県の担当部署は地域連携部東紀州振興課）、観光キャンペーンや情報発信、交通整備などの事業に取り組んできた。

県単位でみると、三重県の場合は、熊野古道（伊勢路）の保全と活用の方針をまとめた「熊野古道アクションプログラム」が各種活動の基盤となっている。最初のアクションプログラムの制定は 2003 年 3 月であり、その後は熊野古道協働会議（2004 年 2 月に設置された）[5] での検討等を経て、2015 年 3 月の「アクションプログラム 3 －保全と活用のための活動指針－」、そして 2022 年 3 月の「アクションプログラム 3、追記編」の策定にまで至っている。「アクションプログラム 3」では、基本となる 3 つの目標として、「価値に気づく」、「守り伝える」、「伊勢路を結ぶ、地域を活かす」を掲げている（熊野古道協働会議編 2015）。県の基本姿勢として、世界遺産そのものの価値･意味を理解し保全することが重要であり、そこから地域の発展につなげるという見解が伺える。三重県の取り組みについて、より詳細に検討する（表 1）。2007 年 2 月には、拠点となる施設「三重県立熊野古道センター」が尾鷲市で開館した。そして熊野古道の宣伝と観光振興に向けた各種の取り組みが継続して行なわれてきたが、特徴的なのは、5 年ごとの節目の年に、「登録 5 周年」、「10 周年」、「15 周年」を掲げ、各種イベントを集中的に開催してきたことである。世界遺産は一つのブランドでもあり、高い知名度は得られているはずだが、定期的に情報発信とアピールを強化することで、いわゆるマンネリ化を防ぎ、観光客の掘り起こしを図ったものと思われる。そして、最近の傾向としては、「熊野古道サポーターズクラブ」[6] の設立（2014 年 5 月）、海外向け PR 動画を配信（2017 年 1 月～）、小学生向け「熊野古道伊勢路謎解きノート」の作成（2021 年 3 月）など、より幅広い層にアピールする企画が顕著になってきた。

以上のように、「紀伊山地の霊場と参詣道」は三県にまたがる広域的遺産であり、その保全も活用も、三県の連携と県ごとの対応という二段構造になっていることが分かった。保全においては、各種法律で保護されている史跡等が対象であるため、定められた方式で保全を図ることになる。一方で、活用に関しては、県ごとの自由度は高く、世界遺産観光について、そして

地域振興に向けて、色々な工夫がなされてきたといえる。

なお表 1 には、東紀州地域における道路交通と各種施設の整備についても、まとめて示した。世界遺産登録後のこの時期は、東紀州において高速道路の整備が急速に進んだ時期と一致する。伊勢自動車道の勢和多気ジャンクションで分岐して南部に至る紀勢自動車道は、着実に東紀州まで南下し、2014 年 3 月に尾鷲市まで到達した。そして、熊野尾鷲道路（自動車専用道路）は、2008 年 4 月に一部開通し、2021 年 8 月に全線開通を迎えた。これにより、県北部から熊野市までが高速道路で直接結ばれることとなった。そして同時に、東紀州では新たな観光施設、道の駅、ホテルの開業なども見られた。

3. 熊野古道伊勢路の来訪者数の推移

次に、熊野古道伊勢路の来訪者数の推移を検討する（図 1）[7]。来訪者数は、2000 年時点では計 78,911 人、2003 年では計 103,187 人であったが、世界遺産に登録された 2004 年には前年比 46% の増加がみられ、計 150,697 人となった。そして、その後数年間は横這い傾向であり、登録 5 周年となる 2009 年には 200,595 人を記録した（前年比 35％増加）。同年には、登録 5 周年記念冊子として「熊野古道伊勢路図絵・平成の熊野詣」が発行され、ウォーク企画や記念シンポジウムの開催があったために（表 1）、熊野古道が注目を集めたものと思われる。

その後はおおよそ増加傾向が継続しており、特に 2014 年の増加と 2019 年の増加が顕著である。前者の来訪者は前年比 39％増加の計 428,698 人、後者では前年比 14％増加の計 376,258 人を記録した。前述したように、三重県では、登録後 5 年ごとに記念イベントが開催され、伊勢路踏破ウォークなどの企画が集中的に実施されてきた。こうした企画が熊野古道への注目を呼び覚まし、新規の観光客を掘り起こしてきたものと思われる。そして 2020 年以後はコロナ禍の影響が大きく、2020 年では計 226,406 人（前年比で 40％減少）、2021 年では計 245,833 人と

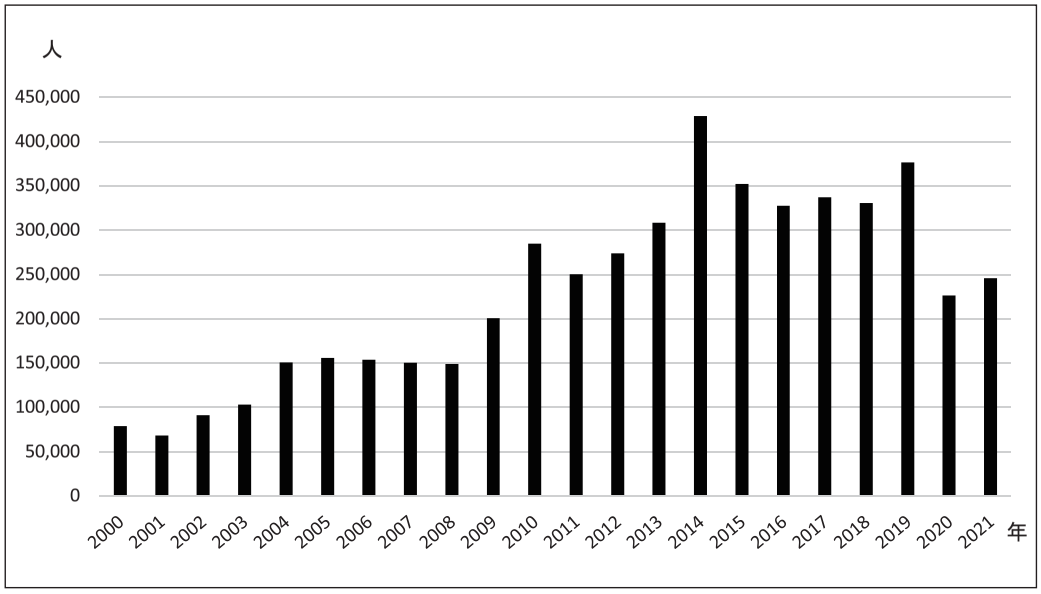


図 1　熊野古道伊勢路の来訪者数の推移
一般社団法人東紀州地域振興公社の資料より作成

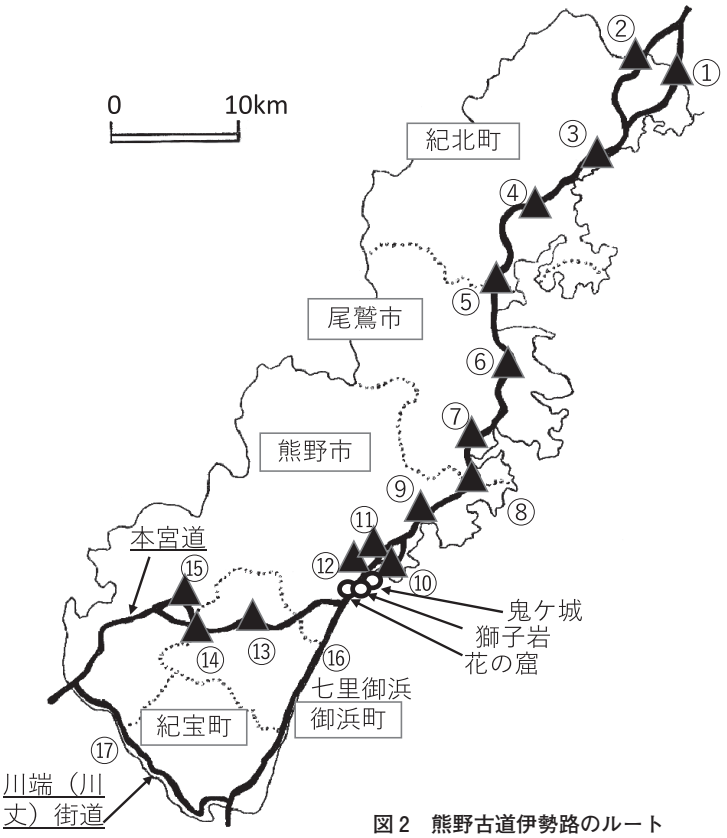
推移している。なお、コロナ禍の中で、三重県北中部の小学校・中学校・高校で、修学旅行の行き先を東京や九州などの遠方から県内の東紀州地域に切り替える例がみられ、東紀州地域振興公社の資料によると、そうした修学旅行（教育旅行）による熊野古道来訪者は、2020年では3,531人、2021年では5,430人と記録されている。

熊野古道伊勢路を歩く人々向けの案内役として、地元の語り部が活動を行なっている[8)]。2022年9月現在、「語り部友の会」メンバーとして143名が登録されている。語り部の依頼に対応する窓口が東紀州地域振興公社であり、同公社の資料によると、遺産登録年の2004年の語り部の案内件数は606回、そして2005年が469回、2006年が319回と記録されている。その後、2016年は618回、2017年は478回、2018年は394回、2019年が377回であった。その後のコロナ禍においても、語り部の案内件数は大きく減少しておらず、2020年が350回、2021年が380回である。その理由としては、上述した修学旅行（教育旅行）の受入の影響が考えられる。さらに、コロナ禍により、団体客や短時間のみで急いで観光スポットを巡る客は確かに減少しただろうが、時間をかけて熊野古道を歩く客、語り部の案内を求めるような「熱心な」客はある程度みられるのでないかと考えられる。

三重県内の熊野古道伊勢路は、東紀州を南北に貫いており、世界遺産は数多くの峠道の集合体である（図2）。次に、これらの峠ごとに来訪者数の推移をみる。表2には、3年刻みで、来訪者数が1位から8位までの峠・地点を並べて示した。世界遺産登録前の2003年、そして2006年と2009年の数値をみると、苔むした石畳道が有名な馬越峠が最も多くの来訪者を集めており、その次には熊野市市街地からのアクセスが容易な松本峠、そして東紀州の玄関口に位置するツヅラト峠などが上位に位置していた。上位3峠の来訪者数の合計値が全体に占めるシェアをみると、45.8%から55.5%、そして47.8%と推移しており、遺産登録により著名な一部の峠に客がやや集中したようであるが、それほど極端ではない。

その後、2010年代に入ると、浜街道・花の窟が多くの客を集めるようになり、他の峠の客数との差が拡大した。これは、2012年に花の窟の隣地に駐車場を備えた商業・休憩施設「花の窟・お綱茶屋」（現在の道の駅「熊野・花の窟」）が開業して来訪客が増えたことが影響している。さらに、世界遺産の著名スポットを急いで回るツアーの参加者が、国道42号線に接する便利な位置にあり、駐車場も準備された花の窟を短時間のみ訪問するという行動パターンが増えたためと推定される（東紀州地域振興公社での聞きとりによる）。花の窟の来訪者の行動は、峠道を歩くという伊勢路特有の観光パターンとは異なるが、統計上は熊野古道来訪者に含まれており、コロナ禍前の2018年では208,199人が浜街道・花の窟を訪問している。これは、熊野古道来訪者全体の63%を占めている（表2）。そして2019年の訪問者は219,907人と過去最高を記録した（来訪者全体の中の58.4%）。他の峠についてみると、2010年代以降は、松本峠の客数も増加し、馬越峠と順位が逆転したことも読み取れる。結局、表2に示された、伊勢路で多くの来訪者を集める峠全体を見ると、北のツヅラト峠と荷坂峠から南の通り峠まで、比較的分散しているといえる。

次に、図3には、主要な7峠を取り上げて、来訪者数の推移をまとめて図示した。ただし、浜街道・花の窟は含めていない。全体をみると、年ごとの変動がかなり大きいが、馬越峠と松本峠とツヅラト峠の3つが、順位の変化はあっても上位に位置するという構図は変わっていない。注目すべきは、2014年をピークとして、それぞれの峠の客数が総じて減少傾向に入っていることである。コロナ禍に至るまでは、浜街道・花の窟の来訪者数が増加を続けてきたため



①	荷坂峠
②	ツヅラト峠
③	一石峠・平方峠・熊ケ谷道
④	始神峠
⑤	馬越峠
⑥	八鬼山越え
⑦	三木峠・羽後峠
⑧	曽根次郎坂・太郎坂
⑨	二木島峠・逢神坂峠
⑩	波田須の道・大吹峠
⑪	観音道
⑫	松本峠
⑬	横垣峠
⑭	風伝峠
⑮	通り峠
⑯	浜街道
⑰	熊野川

図２　熊野古道伊勢路のルート

熊野古道協働会議編（2015）内の地図等を基に作成

表２　熊野古道伊勢路の峠別の来訪者数

年	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	その他	計
2003年	馬越峠 21,918 (21.2)	松本峠 13,412 (13.0)	ツヅラト峠 11,931 (11.6)	始神峠 9,184 (8.9)	浜街道･花の窟 7,278 (7.1)	通り峠 5,608 (5.4)	八鬼山越え 5,400 (5.2)	大吹峠 4,456 (4.3)	24,000 (23.3)	103,187 (100)
2006年	馬越峠 43,876 (28.5)	松本峠 21,175 (13.8)	ツヅラト峠 20,367 (13.2)	始神峠 12,739 (8.3)	通り峠 9,704 (6.3)	浜街道･花の窟 9,207 (6.0)	八鬼山越え 5,054 (3.3)	荷坂峠 4,281 (2.8)	27,468 (17.9)	153,871 (100)
2009年	馬越峠 47,856 (23.9)	ツヅラト峠 26,109 (13.0)	浜街道･花の窟 21,850 (10.9)	松本峠 17,834 (8.9)	始神峠 16,034 (8.0)	八鬼山越え 10,796 (5.4)	熊ケ谷道 10,371 (5.2)	荷坂峠 9,148 (4.6)	40,597 (20.2)	200,595 (100)
2012年	浜街道･花の窟 91,844 (33.6)	馬越峠 31,426 (11.5)	ツヅラト峠 30,183 (11.0)	松本峠 17,942 (6.6)	荷坂峠 16,267 (5.9)	始神峠 12,504 (4.6)	大吹峠 9,843 (3.6)	通り峠 9,018 (3.3)	54,646 (20.0)	273,673 (100)
2015年	浜街道･花の窟 161,835 (45.8)	松本峠 51,615 (14.7)	馬越峠 47,758 (13.6)	ツヅラト峠 21,008 (6.0)	通り峠 12,859 (3.7)	荷坂峠 11,604 (3.3)	風伝峠 8,352 (2.4)	熊ケ谷道 7,580 (2.2)	29,651 (8.4)	352,262 (100)
2018年	浜街道･花の窟 208,199 (63.0)	松本峠 28,602 (8.7)	馬越峠 23,441 (7.1)	ツヅラト峠 13,240 (4.0)	荷坂峠 10,615 (3.2)	通り峠 7,354 (2.2)	始神峠 6,670 (2.0)	八鬼山越え 5,978 (1.8)	26,533 (8.0)	330,632 (100)
2021年	浜街道・花の窟 106,690 (43.4)	松本峠 61,901 (25.2)	馬越峠 25,768 (10.5)	ツヅラト峠 8,749 (3.6)	荷坂峠 7,397 (3.0)	始神峠 5,504 (2.2)	通り峠 4,427 (1.8)	風伝峠 4,247 (1.7)	21,150 (8.6)	245,833 (100)

注）（　　）は構成比（%）、一般社団法人東紀州地域振興公社の資料より作成。

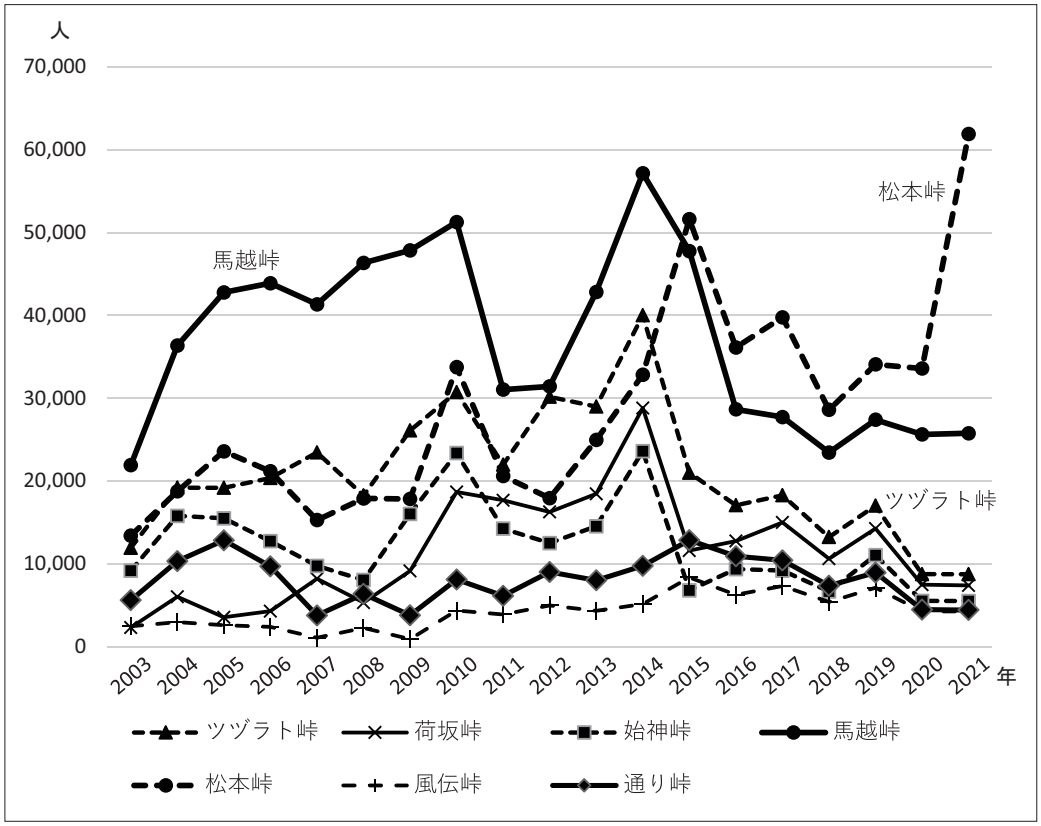


図 3　熊野古道伊勢路の主要な峠別の来訪者数の推移

注）浜街道・花の窟を除く。一般社団法人東紀州地域振興公社の資料より作成

に、古道来訪者全体で明確な減少傾向はみられなかったが（図 1)、浜街道・花の窟を除いて来訪者数を計算すると、2014 年の 294,657 人をピークとして、2018 年には 122,433 人まで減少した。そして翌 2019 年には増加に転じて、156,351 人である。もう一点は、コロナ禍の中で松本峠・馬越峠と他の峠との差が拡大していることである（図 3)。最近 2 年間でも、両峠の訪問者数は他の峠のように減少していないために、他の峠との差が顕著になった[9]。政策的な視点で言えば、多数の客を集める浜街道・花の窟以外の峠、特に松本峠と馬越峠以外の峠でいかに集客を図るかが重要と思われる。

次の図 4 は、熊野古道伊勢路の月別の来訪者数を示す。ここでは、2004 年、2010 年、2015 年、2021 年の数値をまとめた。季節ごとに大きくみて、観光客が集中しているのは春季（3 月～5 月）と秋季（9 月～11 月）であり、対象年次ごとの違いはあまりみられない。3 月～5 月の来訪者数が年間合計値に占めるシェアをみると、この 4 年次の数値は最低 23.2％から最大 31.6％であり、9 月～11 月については 31.1％から 35.7％である。熊野古道観光の基本パターンは峠を歩くことであり、これは観光客にある程度の体力を求める。しかも高地ではなく標高の低い峠を歩くので、そもそも暑い季節（7 月、8 月）には適していないのである。結局、学校が夏休みとなる季節に集客を図るのが困難というのは、熊野古道観光の大きな課題として残る。

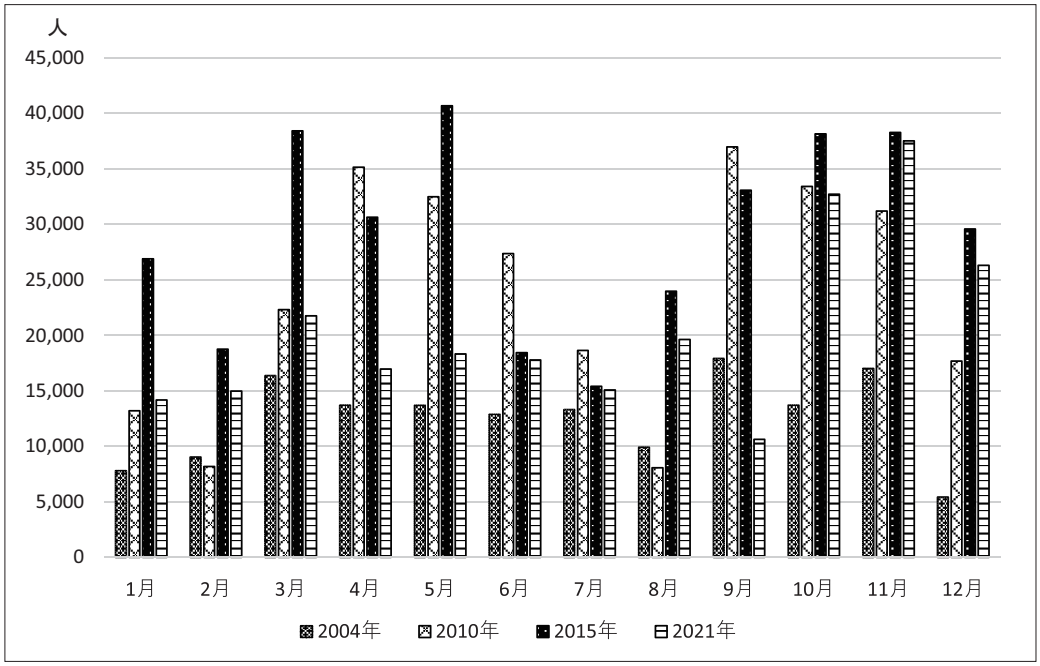


図 4　熊野古道伊勢路の月別の来訪者数の推移
一般社団法人東紀州地域振興公社の資料より作成

4. 東紀州と三重県への観光入り込み客数の推移

次に、熊野古道伊勢路観光を、東紀州全体の観光の中で、さらに三重県全体の中に位置づけて捉えてみたい。図 5 には、2005 年以降の東紀州の市町別に観光レクリエーション入込客数（のべ数）の推移を整理した[10]。2005 年以降の東紀州の観光入込客数は概ね増加傾向にあり、2016 年にピークに達した（計 4,719,083 人）後、少々減少している。より詳細にみると、2005 年から 2010 年にかけて紀北町の客数が増加したが、これは、道の駅「紀伊長島マンボウ」や「きいながしま港市」の集客増加等による。同時期に、尾鷲市では「三重県立熊野古道センター」と「夢古道おわせ」の開業（2007 年）、「夢古道の湯」の開業（2008 年）があり、入込客数の増加が見られた。このように、新たな施設の開業が集客に直接結びついており、例えば前述した熊野市の「花の窟・お綱茶屋」の開業（2012 年）、紀北町の「始神テラス」の開業（2015 年）が入込客数の増加を引き起こしている。

このように、新規高速道路の開通や商業施設の開業等により、東紀州地域では順調に入込客数が増加してきたといえる[11]。その中で、熊野古道の客数が全体に占めるシェアをみると、2005 年時点では 4.8％であったが、その後少しずつ増加し、2014 年にピークに達した（10.9％）。そしてその後はやや減少し、2019 年で 9.3％、コロナ禍の 2021 年では 9.8％である。すなわち、東紀州観光全体の中で、熊野古道観光が占める地位は全体の約 1 割程度という位置づけと評価できる。また、同資料により、2019 年の東紀州の入込客数を月別にみると、8 月が最も多く、年間合計の 13.6％を占めている。一方で、熊野古道の 8 月の客数は年間合計の 7.3％に過ぎない。東紀州観光と熊野古道観光を比べてみると、観光シーズンからみて非調和的であるといわざるをえない。

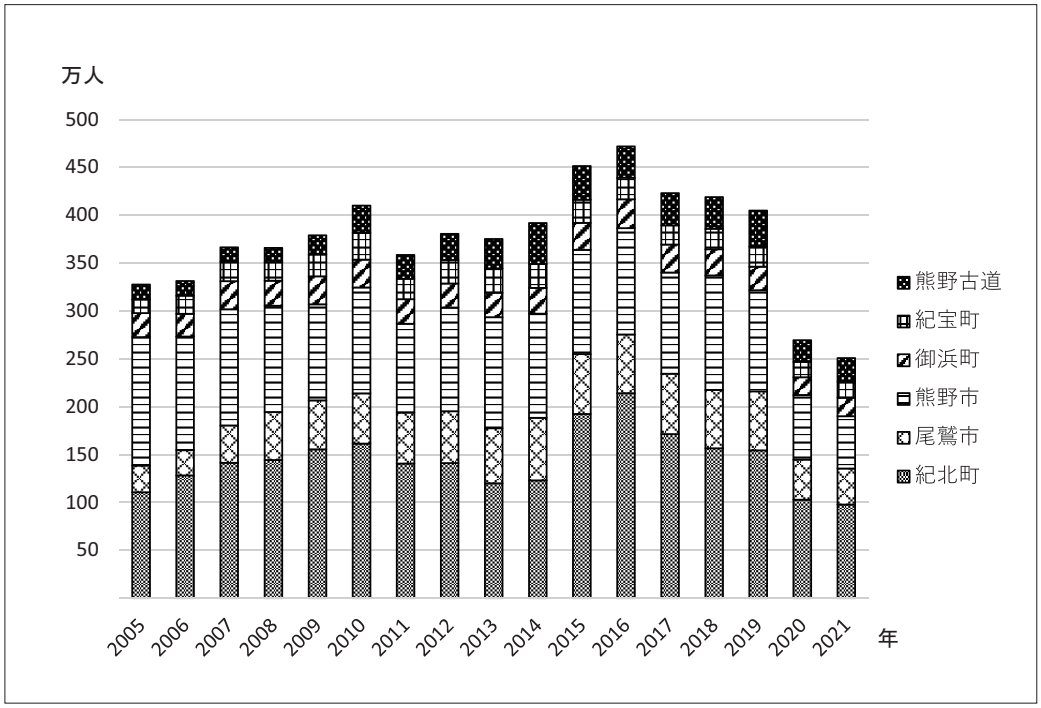


図 5　東紀州地域の市町別の観光レクリエーション入込客数（のべ数）の推移
『観光レクリエーション入込客数推計書』（三重県観光政策課）各年版より作成

より視野を広げて、三重県全体について検討する。図 6 により観光入込客数の推移をみると、三重県全体では、2005 年からコロナ禍の直前まで、ほぼ連続して客数の増加がみられた。2005 年（計 5,301 万人）から 2019 年（計 7,628 万人）までの増加率は 32.7％である。ただし、地域間の違いは大きく、この 14 年間の増減率をみると、北勢地域は 77.7％の増加、伊勢志摩地域は 47.2％の増加を示しており、絶対数でみても両地域は卓越している。前者ではナガシマリゾートの集客力が極めて大きく、この期間においても顕著な増加がみられた[12)]。後者においては、伊勢神宮の式年遷宮（2013 年）の影響が大きかった[13)]。これに対して、中南勢地域は 2.9％の減少であり、伊賀地域は 9.6％の増加にとどまった。東紀州の増加率は 23.6％であり、着実に入込客数が伸びたといえよう。三重県の観光においては、このように、伊勢志摩地域と北勢地域が大きな位置を占めており、両者を合わせると、2019 年の県全体の入込客数の 77.6％を占めている。一方で、東紀州のシェアは 5.3％であり、かつ溯ってみると、2005 年時点の 6.6％から低下している。三重県内の観光における東紀州の位置づけは、この程度であると確認できた。

以上は、各観光地の入込客数を合計したのべ数による考察であるが、三重県の観光統計においては、県全体や地域ごとの入込客数を示す場合に、実数で示している場合が多い[14)]。実数でみると、県全体では、2005 年（計 3,149 万人）から 2019 年（計 4,304 万人）までに 36.7％の増加がみられた。この増加率はのべ数による計算値に近いが、地域ごとにみると、違いがみられる。この時期の増加率が最も高いのは東紀州であり（60.9％）、北勢地域（57.8％）、伊勢志摩地域（32.1％）と続いている。実数でみた場合に東紀州の増加率が高いのは、のべ客数の増加に加え、地域内で観光客が立ち寄る地点数が減少しているためと思われるが、熊野古道観光

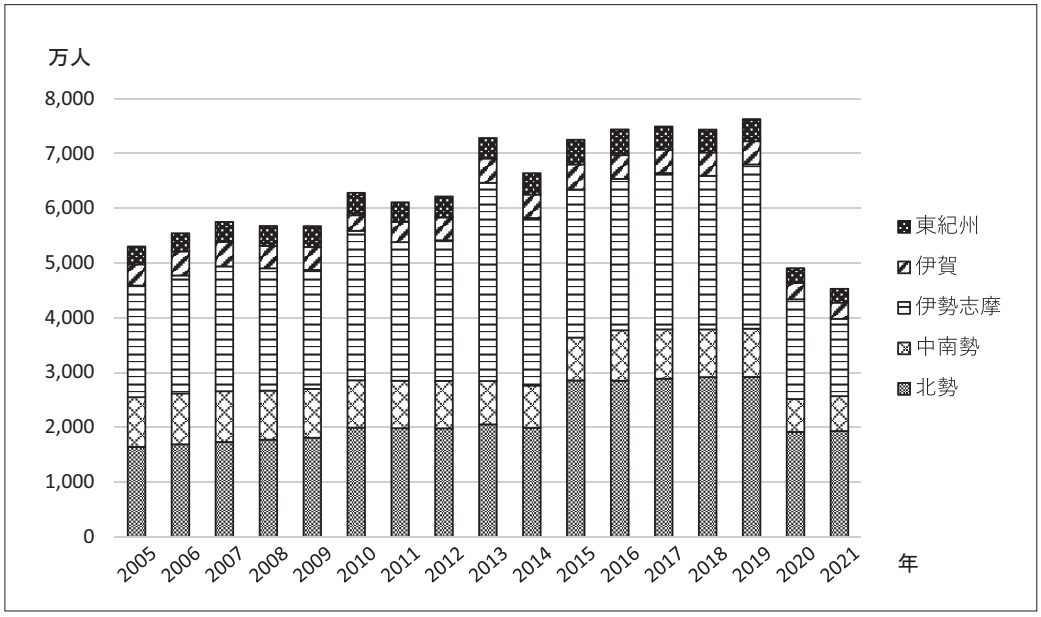


図 6　三重県の地域別の観光レクリエーション入込客数（のべ数）の推移
『観光レクリエーション入込客数推計書』（三重県観光政策課）各年版より作成

がどの程度影響を与えているかは不明である。また、県全体に占めるシェアをみると（2019年）、北勢地域と伊勢志摩地域を合わせて 71.6%、東紀州は 5.3%であり、上記ののべ数による計算値に近い。

5. 熊野古道伊勢路の来訪者調査からみた観光客の特徴

この章では、熊野古道伊勢路の来訪者を直接対象にした調査報告書を基に、観光客の特徴を分析する。ここでは、2021 年 10 月から 2022 年 2 月にかけて行った調査結果をまとめた一般社団法人東紀州地域振興公社（2022）[15] の資料の一部を引用する。まず対象者の属性であるが、全体の 46.3%が男性、53.7%が女性である。年齢構成については、50 歳代が最も多く（33.3%）、40 歳代（19.8%）と 60 歳代（19.8%）と合わせると、全体の 72.9%を占める。そして居住地については、12.8%が東紀州地域、39.5%が東紀州地域以外の三重県で、他は県外（最も多いのは 18.2%の愛知県）であり、旅行の同行者については、夫婦・カップルが最も多く（36.8%）、友人との旅行（24.0%）、一人旅（18.2%）が続く。以上より、熊野古道を歩く観光客の属性がおおよそ理解できよう。三重県・愛知県を中心とした比較的近い地域からやってくる中高年世代の少人数グループという観光客像である。

伊勢路への訪問回数をみると、初めての訪問が 38.8%、2 回目が 17.8%、3 回以上が 42.8%である。次に興味深いのが、伊勢路への訪問のきっかけである（表 3）。全体として、「ハイキング・登山を楽しむため」、「自然を楽しむため」、そして「世界遺産だから」という回答が多い。居住地による違いも認められ、地元の東紀州地域の住民は、「健康のため」「自然を楽しむため」が最も多く、次いで「気軽にウォーキングを楽しむため」という回答が多い。県外の人については、「ハイキング・登山を楽しむため」が 1 位であるが、「世界遺産だから」、「古道の歴史・

文化が好きだから」という回答も多くなっている。そして訪問回数別に分けてみると、初めての訪問者の場合は特に「世界遺産だから」という回答が最も多く、「古道の歴史・文化が好きだから」もかなり多い。一方で、3 回以上の場合は「伊勢路を全て踏破したい」という回答の多さが注目される。このように、居住地と訪問回数の違いにより、熊野古道に対する期待と意味づけが異なっていることが分かる。

筆者は、かつて三重交通が主催したバスツアー「熊野古道大遠足」（2001 年）の参加者アンケートを分析したことがある（安食 2003）。そこから要約すると、参加者の特徴としては、女性が多く（70.8%）、年齢構成では中高年が中心であり（40 歳代〜60 歳代を合わせると 85.9%）、2 人で参加（37.0%）、または 5 人以上のグループで参加（30.7%）という例が多かった。熊野古道の訪問回数については、半数近くが初めての訪問であった（44.0%）。そして、自由記述の分析より、自然と親しむハイキングやウォーキングの場として熊野古道は認識されており、古道の文化的・歴史的価値についてはあまり関心が高くないとまとめて述べた（安食 2003）。前回の調査対象はバスツアー参加者であり、今回はツアー参加者はほとんどみられない（自家用車利用が 81.2%、複数回答あり）という違いを考慮する必要はあるだろうが、結局のところ、両者とも、訪問客の中心は中高年世代である。そして、熊野古道は自然遺産ではなく文化遺産なのであるが、大きくみてハイキングや自然を楽しむ場として古道が認識されている点はあまり変わっていない。しかし、世界遺産登録からかなりの年数が経過し、世界遺産としての知名度が高まり拡大してきたことにより、特に県外からの客と初めての客の場合は、熊野古道が世界遺産であることが古道訪問の大きな要因となっており、その歴史・文化も魅力と捉えられている[16)]。世界遺産・熊野古道に関する情報が、自治体や旅行業者のホームページ、テレビや書籍（浅野ほか編 2004、尾﨑編 2016 など多数）ほかの各種メディアにより大量に発信されてきた影響が大きいと思われるが、現在でも世界遺産ブランドの魅力と集客力は認められるといえ

表 3　熊野古道伊勢路を訪問したきっかけ

		伊勢路をすべて踏破したい	世界遺産だから	古道の歴史・文化が好きだから	巡礼・参拝のため	ハイキング・登山を楽しむため	気軽にウォーキングを楽しむため	自然を楽しむため	健康のため	自分（の人生や生き方）を見つめ直すため	その他	無回答	合計
全体		126 (26.0)	186 (38.4)	118 (24.4)	17 (3.5)	231 (47.7)	135 (27.9)	204 (42.1)	127 (26.2)	33 (6.8)	18 (3.7)	5 (1.0)	484 (100)
居住地	東紀州地域	14 (22.6)	13 (21.0)	7 (11.3)	1 (1.6)	27 (43.5)	28 (45.2)	32 (51.6)	32 (51.6)	8 (12.9)	3 (4.8)	-	62 (100)
	東紀州以外の三重県	54 (28.3)	64 (33.5)	34 (17.8)	2 (1.0)	86 (45.0)	57 (29.8)	81 (42.4)	50 (26.2)	9 (4.7)	6 (3.1)	4 (2.1)	191 (100)
	三重県外	58 (25.4)	107 (46.9)	77 (33.8)	14 (6.1)	117 (51.3)	49 (21.5)	91 (39.9)	44 (19.3)	16 (7.0)	9 (3.9)	1 (0.4)	228 (100)
訪問回数	今回が初めて	22 (11.7)	97 (51.6)	57 (30.3)	9 (4.8)	84 (44.7)	49 (26.1)	84 (44.7)	35 (18.6)	12 (6.4)	6 (3.2)	3 (1.6)	188 (100)
	2 回目	18 (20.9)	29 (33.7)	11 (12.8)	3 (3.5)	35 (40.7)	21 (24.4)	40 (46.5)	27 (31.4)	4 (4.7)	2 (2.3)	1 (1.2)	86 (100)
	3 回目以上	85 (41.1)	59 (28.5)	50 (24.2)	5 (2.4)	110 (53.1)	65 (31.4)	80 (38.6)	65 (31.4)	17 (8.2)	10 (4.8)	-	207 (100)

注）（　）は構成比（%）、下線は 30% 以上、複数回答あり。一般社団法人東紀州地域振興公社（2022）より引用。

よう。

次に、調査対象者が歩いた（歩く予定の）伊勢路の峠・ルートをみると、回答者の 75％が 1 つの峠のみを歩いている。その対象は馬越峠と松本峠の割合が大きい（前者が 37.0% で後者が 29.5%、複数回答あり）。[17] 一般社団法人東紀州地域振興公社（2022）では、熊野古道の訪問回数と選択される峠を関連付けて、馬越峠と松本峠は初めての古道歩きで選択されることが多く、2 回目に訪れた人は始神峠やツヅラト峠を、そして 3 回目以降には八鬼山越えや風伝峠などを選択する傾向があると、段階的にまとめて述べている。

そして、調査では不満に感じたことや改善してほしいことを尋ねているが、その回答は、「古道沿いにトイレが少ない」（32.4％）、「古道沿いに駐車場が少ない、わかりにくい」（27.7％）、「古道までの移動手段が不便、わかりにくい」（24.2％）の順である（複数回答あり）。前回の調査では、トイレの整備に対する要望が多数寄せられており（安食 2003）、トイレ問題は依然として大きな課題である。さらに、前回のツアー客対象の調査では見えにくかった交通アクセスの問題も重要である。そして、本調査の最後に、伊勢路を訪問した満足度、伊勢路への再来訪の意向、伊勢路の紹介意向について尋ねている。満足度については「大変満足」と「満足」を合わせて 91.8% であり、次に、伊勢路にまた来たいと「大変そう思う」と「そう思う」を合わせて 89.5%、伊勢路を誰かに紹介したいと「大変そう思う」と「そう思う」を合わせて 88.3% であり、観光客の評価は全体的に高い。

6. おわりに

本稿では、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」を対象として、遺産登録後の観光客数の変化、そして観光客の特徴の変化を把握しようとした。対象は三重県側の世界遺産、すなわち熊野古道伊勢路である。その結果は以下のようにまとめられる。

まず、「紀伊山地の霊場と参詣道」は三県にまたがる広域的遺産であり、その保全も活用も、三県の連携と県ごとの対応という二段構造になっていることが分かった。熊野古道の活用に関しては、観光振興と地域活性化に向けて、県ごとに色々な工夫がなされてきた。三重県の場合は、5 年ごとに「登録記念年」を掲げて、記念イベントや熊野古道関連の企画を多数実行してきた。

熊野古道伊勢路の訪問者数の推移をみると、2004 年の世界遺産登録後、順調に増加してきた。上述したように、三重県が 5 年ごとに登録記念年として多種の事業を企画してきた影響が強い。ただし峠・地点別にみると、浜街道・花の窟への来訪者の集中が強まっており、2014 年以降、他の峠では総じて観光客数は減少傾向に入った。そして、コロナ禍の中で、訪問者が多い松本峠・馬越峠と他の峠との差が拡大している。次に、東紀州の観光全体の中でとらえると、伊勢路の来訪者数は約 1 割を占めるまでに成長した。また三重県の地域ごとの観光入込客数をみると、東紀州は県全体の約 5% という位置づけである。

観光客の特徴について、2001 年の調査結果と 2021～2022 年の調査結果を比較すると、中高年世代が中心となっていることや、多くの来訪者にとって熊野古道がハイキングや自然を楽しむ場として認識されていることは変わっていない。ただし、特に県外からの客と初めての客の場合は、熊野古道が世界遺産であることが古道訪問の大きな要因となっており、その歴史・文化も魅力と捉えられている。世界遺産について、関連するホームページやテレビ、書籍などが

大量の情報を発信しており、熊野古道についても知名度が高まり拡大してきた、そして現在でも世界遺産ブランドの魅力と集客力は認められるといえよう。

最後に、本稿では観光客数などの数値の分析が中心であったが、世界遺産登録が与えた影響については、地元の人々の意識の変化や、東紀州地域のもつイメージの変化なども想定される。それらについての検討は今後の課題としたい。

謝辞

本稿執筆にあたっては、一般社団法人東紀州地域振興公社、三重県地域連携部南部地域活性化局東紀州振興課の方々に、資料の入手等において便宜を図っていただきました。ここに記して、感謝申し上げます。

注

1) 日本ユネスコ協会連盟ホームページより（https://www.unesco.or.jp/activities/isan/about-worldheritage/、最終閲覧日は 2022 年 10 月 29 日）

2) その内訳は、①タイプが、白川郷、白神山地、石見銀山遺跡とその文化的景観、琉球王国のグスクおよび関連遺跡群、紀伊山地の霊場と参詣道、②タイプが、古都京都の文化財、古都奈良の文化財、日光の社寺、そして③タイプが、法隆寺地域の仏教建造物、姫路城、原爆ドーム、厳島神社、知床である。屋久島については本文中で明示されていないが、タイプ①に属すると思われる。

3) 一般社団法人東紀州地域振興公社のホームページによると（https://kumanokodo-iseji.jp/higashikishu/、最終閲覧日は 2022 年 10 月 31 日）、同公社は、東紀州地域の観光と産業の振興、地域おこしの推進を目的として、2007 年に設立され 2020 年に一般社団法人となった。その前身は、1994 年に設立された東紀州地域活性化事業推進協議会である。同公社は、東紀州地域内の熊野古道の保全・管理や語り部の手配などを行なっている。

4) 2016 年に、和歌山県内の一部の参詣道が世界遺産の構成資産として、追加登録された。この軽微な変更の提案のために、遺産全体の「包括的な保存管理計画」および県ごとの「保存管理計画」が改訂され（2015 年 12 月）、現在に至っている。

5) アクションプログラムの策定が契機となり、熊野古道に関する活動を行なっている関係者が一同に会して意見交換等を行なっていく場として、熊野古道協働会議が 2004 年 2 月に設置された。

6) 「熊野古道サポーターズクラブ」は、登録 10 周年となる 2014 年 5 月に、熊野古道伊勢路を守り伝える活動を応援するために、一般市民の参加型組織として設立された。一般会員と法人会員の 2 種類があり、古道清掃ウォーク等の企画に会員が参加している（サポーターズクラブのホームページを参照、https://www.kodo.pref.mie.lg.jp/supportersclub/、最終閲覧日は 2022 年 10 月 30 日）。

7) 語り部による案内人数、各市町などで調査している熊野古道関連地域の入込客数や熊野古道関連イベントの参加者数、ならびに熊野古道の峠登り口での地点調査データなどを参考にして、東紀州地域振興公社が算出した推計値である（同公社の資料による）。

8) 語り部 1 人が最大 20 人までの観光客を案内する仕組みとなっており、1 回の案内で 5,000 円を徴収している

9) 松本峠の来訪者数は、コロナ禍の 2021 年に大きく増加しているが、その背景には、歩く距離が割と短く、駐車場が整備されている等の条件をもつ松本峠に、上述した学校主催の旅行参加者が集中した等の事情がある（東紀州地域振興公社の資料による）。

10) 三重県観光政策課編集発行の『観光レクリエーション入込客数推計書』では、2005 年版より入込客数推計の手順を改め、「全国観光統計基準」を採用した。そのため、より古いデータと直接比較することができないので、ここでは 2005 年以降を対象とする。用いた資料は、三重県観光政策課による『同　推計書』の紙版と Web 版（https://www.pref.mie.lg.jp/D1KANKO/84074013374.htm、最終閲覧日は 2022 年 10 月 31 日）である。なお、この報告書内の熊野古

道関係データの基は、第 3 章で用いた東紀州地域振興公社の推計による数値である。

11) 個別に商業施設をみると、例えば道の駅「紀伊長島マンボウ」では、紀勢自動車道の南進に伴い、2012 年から 2013 年にかけて客数の減少がみられた。そして、熊野尾鷲道路の開通後、2015 年に道の駅「熊野きのくに」は観光調査ポイントから外れることとなった。このように、高速道路の延長が負の影響を与えている場合もある。

12) 三重県の『観光レクリエーション入込客数推計書』によると、桑名市のナガシマリゾートの入込客数は、2014 年の 670 万人から 2015 年には 1,515 万人へ急増している。

13) 同報告書によると、2012 年の伊勢神宮の入込客数は 803 万人（内宮が 551 万人、外宮が 252 万人）であったが、式年遷宮が行なわれた 2013 年には 1,420 万人（内宮が 885 万人、外宮が 536 万人）に増加した。

14) 市町が集計したのべ数を「観光客実態調査」に基づき得られた係数である平均訪問観光地点数（立寄り率）で除したものが、実数である。

15) 東紀州地域振興公社が企画し、百五総合研究所が受託して行なった調査である。2021 年 10 月から 2022 年 2 月にかけて、熊野古道伊勢路を歩いた人を対象にして、QR コードを用いた Web 上での調査を行なった。有効回収数は 484 件である。

16) 今回の調査はコロナ禍で行われたものであり、観光客が全体的に減少している中で熊野古道を訪れているのだから、かなり「熱心な」古道のファンが多いと捉える必要もある。

17) 3 章で用いた峠別データでは、浜街道・花の窟の来訪者が大きな割合を示しているが、この 2021 年度の調査の質問では、浜街道は選択肢に含まれているが、花の窟は含まれておらず、調査・集計の方法が異なっている。

参考文献

浅野真則・三浦美香・高橋真理子編（2004）：『聖地巡礼　熊野・吉野・高野山と参詣道』、伊勢文化舎.

安食和宏（1998）：三重県における歴史街道を生かした地域づくりへの取り組みについてー特に熊野古道を中心としてー．菅原洋一編著『伊勢街道文化に関する基礎的研究－歴史的街道を軸にした街道文化の広域的ネットワークによる地域づくりへの活用に向けて－』（科研費補助金研究成果報告書），pp.43-54.

安食和宏（2003）：熊野古道世界遺産登録に向けての課題についてー訪問者と語り部の意識調査をもとにした考察ー．『三重県における工業化社会・自然環境の総合環境学的研究：東紀州の文化・民俗学的研究』（三重大学学長裁量経費・研究成果報告書），pp.60-94.

安食和宏（2007）：県境を越える地域づくりー吉野熊野地域ー．藤田佳久・田林明編『日本の地誌 7：中部圏』、朝倉書店、pp.388-392.

一般社団法人東紀州地域振興公社（2022）：『熊野古道来訪者調査報告書』、一般社団法人東紀州地域振興公社.（https://kumanokodo-iseji.jp/wp-content/uploads/2022/06/%E7%86%8A%E9%87%8E%E5%8F%A4%E9%81%93%E6%9D%A5%E8%A8%AA%E8%80%85%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B8.pdf、最終閲覧日は 2022 年 10 月 31 日）。

尾﨑裕雄編（2016）：『熊野古道　紀伊山地の霊場と参詣道を歩く』、宝島社.

川浪朋恵（2016）：小笠原諸島における世界遺産登録前後の観光客の変容.「地理学評論」、89A、pp.118-135.

神田孝治（2012）：『観光空間の生産と地理的想像力』、ナカニシヤ出版.

熊野古道協働会議編（2015）：『熊野古道アクションプログラム３．保全と活用のための活動指針』、熊野古道協働会議.

熊野古道協働会議編（2022）：『熊野古道アクションプログラム３．保全と活用のための活動指針．追記編』、熊野古道協働会議.

合田昭二（2011）：伝統的建造物群保存地区山村と観光－岐阜県白川村と長野県白馬村を例に－．藤田佳久編著『山村政策の展開と山村の変容』、原書房、pp.143-168.

世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」三県協議会編（2015）：『世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に関する包括的な保存管理計画 』、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」三県協議会.

田中滋・寺田憲弘（2021）：『聖地・熊野と世界遺産－宗教・観光・国土開発の社会学－』、晃洋書房.

淡野明彦（2008）：世界遺産と観光に関する地理学的アプローチ.「地理空間」、1-2、pp.114-127.

千葉昭彦（2014）：世界遺産と地域経済－平泉の観光・まちづくりを対象として－.「経済地理学年報」、60、pp.137-145.
長谷川俊介（2010）：世界遺産の普及啓発と教育.「レファレンス」、60-5、pp.5-27.
三重県編（2015）：『世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」三重県保存管理計画 』、三重県.